



嵐山町長 佐久間 孝光氏

町長のメッセージ

～与えられる喜びから与える喜びへの転換こそ新時代令和の価値観～

令和2年9月9日の町長就任以来、「人が宝の町づくり」をモットーに日々諸課題解決のため邁進してまいりました。本年6月には向こう10年の指針となる総合振興計画を策定し、いよいよ新しい時代に対応するまちづくりがスタート致しました。

武蔵嵐山駅西口地区の整備、都市計画道路の整備及び産業団地の建設、観光資源の充実、景観の保全、学校再編等々実施すべき事業は数多くあります。しかし、全ては「人」次第。人財育成とともに諸事業を推進します。

はじめに

嵐山町は、埼玉県のほぼ中央に位置し、都心から60km圏にある。自然が豊かで、国蝶オオムラサキが生息する地としても知られている。

交通面は、東武東上線が町内を東西に走り、武蔵嵐山駅が設置されている。また、東武東上線の北側を関越自動車道が東西に通り、嵐山小川ICが利用できるなど、交通の利便性が高い。

町名の由来は、明治神宮の森や日比谷公園など多数の公園を設計し、「日本の公園の父」と言われる埼玉県出身の林学者・造園家の本多静六博士が、昭和3年に嵐山溪谷を訪れた際、溪谷と周囲の林の景観が京都の「嵐山」に大変よく似ていることから、「これは武蔵嵐山だ」とつぶやいたことにある。後に町名が「嵐山町」となり、東武東上線の菅谷駅も武蔵嵐山駅に改名された。

嵐山溪谷には四季を通じて多くのハイカーが訪れるほか、溪谷沿いに設置されているバーベキュー場にも多くの人が訪れる。令和元年にはバーベキュー場近くに千年の苑ラベンダー園がオープンし、まちの魅力を一層高めている。

また、歴史好きな人にも魅力的なまちで、来年1月放送開始予定の大河ドラマ「鎌倉殿の13人」の登場人物ともゆかりがある。平家追討を果たした木曾義仲がこの地に生まれ、町内には鎌倉武士として名を馳せた畠山重忠が構え住んだ菅谷館跡がある。

★武蔵嵐山駅西口の整備事業

本多博士が訪れた後の昭和5年、ある新聞社の東日本新名物という企画で「東にも嵐山あり 東京を離れて僅か1時間半の景勝」と紹介されると、観光客が大勢押し寄せるようになり、戦前の最盛期には年間100万人が訪れたという。

戦後、モータリゼーションが進むと、自動車で直接溪谷へ向かう人が増え、かつて活気のあった駅周辺は、人通りが減って最近では空き家も目立つようになった。

町では、駅周辺のかつての活気を取り戻し、より便利で快適なまちにするため、鉄道で溪谷やバーベキュー場などを訪れる際の玄関口となる駅西口の整備事業に取り組んでいる。完成する令和4年度には、既に駅西口に設置されているおしゃれな観光情報発信スポット「嵐なび」とともに、来訪者を迎えてくれるだろう。



武蔵嵐山駅から徒歩でもアクセス可能なバーベキュー場

嵐山町概要

人口(2021年10月1日現在)	17,693人
世帯数(同上)	8,193世帯
平均年齢(2021年1月1日現在)	50.4歳
面積	29.92km ²
製造業事業所数(工業統計)	49所
製造品出荷額等(同上)	1,449.0億円
卸・小売業事業所数(経済センサス)	127店
商品販売額(同上)	198.2億円
公共下水道普及率	67.5%
舗装率	47.8%

資料:「令和2年埼玉県統計年鑑」ほか



主な交通機関

- 東武東上線 武蔵嵐山駅
- 関越自動車道 嵐山小川ICから町役場まで約4km

DMO設立による町の活性化

観光資源が点在している嵐山町は、従来から多くの人が訪れるものの、町全体の活性化につながっていないという課題があった。

そこで、観光資源を有機的に結び付け、町が持続的に活性化していけるよう、観光庁が設置を推進しているDMO(観光地域づくり法人)の設立を目指した取り組みを行っている。

町ではDMOの設立により、観光スポットへの集客はもちろんのこと、小麦農林61号を使った食品の販売強化を図っている。小麦農林61号は小麦の品種のひとつで、うどんや饅頭などに適したふっくら、もちりした食感と風味の良さを特徴としている。栽培効率の良い品種の誕生により、農林61号は埼玉県の奨励品種から外れ、種子の生産が終了したが、懐かしい味に対するこだわりを持つ人が多くいたことから、農林61号の栽培を復活させ、



農林61号を使ったうどん

町内外の食品製造事業者にも農林61号の使用を呼びかけている。農林61号を使用した食品は町内外の協賛店や国道254号沿いの農産物直売所、駅西口の「嵐なび」で購入することができる。テレビなどのメディアでも取り上げられるなど盛り上がりを見せている。まちを訪れた際には是非立ち寄ってみたい。

第6次総合振興計画を策定

町では令和3年度から10年間の長期的なまちづくりの指針となる「第6次嵐山町総合振興計画」を策定し、重点的に推進されるプロジェクトを「子どものびのび成長プロジェクト」・「みんなわくわく活躍プロジェクト」・「地域いきいき安心プロジェクト」とした。

全国的に進む少子・高齢化は嵐山町も例外ではなく、人口は平成12年をピークに減少に転じている。

「みんなわくわく活躍プロジェクト」では、「目指す姿」として「嵐山町の認知度を上げ、より多くの人々が町を訪れることでビジネスチャンスを広げます」と掲げられている。まちを活性化するためには多くの人に訪問してもらうことが必要であり、駅西口の整備や、小麦農林61号を使った商品の開発、販売強化など、その取り組みは既に始まっている。この取り組みが相乗効果を発揮し、「子どもがのびのび成長」し、「地域がいきいき」となることを願いたい。

(太田富雄)